

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

本市がめざす学びの姿は、ICT環境を最大限に活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両立させることにあります。従来の一斉指導型授業では、学習の進度や理解度の異なる児童生徒が一律の内容を同じペースで学ぶことが主流でした。しかし、ICTの導入により、児童生徒一人ひとりの学習の進み具合や興味関心に応じた学びを実現することが可能となり、さらに教室内外での協働を促進し、より深い学びへとつなげる環境が整いつつあります。

【個別最適な学びの実現】

児童生徒が自分の学習状況に応じて、必要な教材や課題に取り組み、適切なフィードバックを受けながら、学びを進めることをめざします。ICTを活用することで、一人ひとりの学習状況に応じた指導が可能になります。

例えば、ドリルアプリを活用した基礎学習では、得意な単元は素早く進め、苦手な部分は繰り返し学ぶことができるようになります。また、児童生徒の学習履歴を記録・分析することで、どの分野が得意で、どの部分に課題があるのかを即座に把握し、それに応じた教材やサポートを提供することが可能です。こうした仕組みを活用することで、従来の一斉型授業では対応が難しかった「理解が追いつかない児童生徒へのフォロー」と「先に進みたい児童生徒の学びの深化」の両立をめざします。

【協働的な学びの促進】

ICTを活用することで、児童生徒同士の協働的な学びの充実をめざします。従来授業では、グループワークや話し合いの場面が限られており、協働的な学びの機会が十分に確保できていないケースも多く見られました。しかし、クラウド型の学習支援ツールを活用することで、時間や場所を問わずに共同作業ができるようになります。

例えば、Googleドキュメントやスライドを活用することで、グループで同時に編集作業を行うことができます。これにより、一つの資料を共同で作成しながら、それぞれの意見をリアルタイムで反映させたり、フィードバックを即座に受けたりすることが可能になります。また、ロイロノートを活用した意見共有では、児童生徒が自分の考えをカード形式で投稿し、他の児童生徒と相互に意見を交換することができるため、より多様な視点を得ることができます。

さらに、協働的な学びは、学級を超えた取り組みにも応用できます。異なる学校の児童生徒同士がオンライン上でディスカッションを行うことで、普段の学校生活では得られない新たな視点を学ぶことができます。

【学びの可視化と振り返りの充実】

ICTの活用により、児童生徒の学びの過程をデータとして記録し、可視化することをめざします。これにより、単なる成績評価だけでなく、学習の過程や思考の流れを振り返ることができるため、より深い学びの定着につながります。

例えば、児童生徒が作成したデジタルポートフォリオを活用することで、学習の成果や成長の記録を蓄積し、必要に応じて振り返ることが可能になります。また、教師は児童生徒の学習ログを分析し、一人ひとりの理解度や進捗状況に応じたフィードバックを行うことができます。これにより、児童生徒自身が「自分の学びを主体的に振り返る」習慣を身につけることができるようになります。

さらに、学習の可視化は、保護者との連携にも有効に活用できます。従来の学校からの学習報告は、通知表や学期末の面談が中心でしたが、ICTを活用することで、日々の学習記録や成果をオンライン上で共有することが可能になります。これにより、保護者が家庭での学習サポートを行いやすくなり、学校と家庭が一体となって児童生徒の学びを支える体制をめざします。

【これからの学びの方向性】

GIGAスクール構想のもと、ICTを活用した学びの可能性は大きく広がっていますが、最も重要なことは「ICTを単なるツールとして終わらせず、児童生徒の学びを変革するために活用すること」です。従来の一斉授業にICTを取り入れるだけではなく、個別最適な学びと協働的な学びのバランスを取りながら、児童生徒が主体的に学びに向かう環境を整えることが求められます。

そのためには、教師の役割も従来の「知識の伝達者」から、「学びの支援者」「ファシリテーター」へと変化することが求められます。教師自身がICTを活用しながら、児童生徒の学びを深めるサポートを行い、学習の進め方を個々に調整できるようになることをめざします。

2. GIGA第1期の総括

【GIGAスクール構想第1期の成果と現状】

本市では、令和2年度からGIGAスクール構想のもと、1人1台端末環境の整備を進め、令和2年度末には全児童生徒に端末が行き渡りました。授業支援アプリとして「ロイロノート」、学習支援アプリとして「Qubena」「タブドリLive!」「Google Workspace for Education」などを導入し、従来の学習スタイルにICTを組み合わせることで、学習の効率化や多様化が進みました。

また、オンライン授業の実施が可能になり、新型コロナウイルス感染症拡大時にはICT環境を活用したリモート学習を一定程度実施しました。これにより、対面授業が困難な状況でも学びを継続することが可能となり、ICTの教育的価値が改めて認識される機会となりました。

【課題】

一方で、GIGAスクール構想第1期では多くの課題も浮き彫りになりました。特に、次の3点が大きな課題として挙げられます。

1. ICT活用の段階が限定的

- ・ICTの活用は主にSAMRモデルの「代替（S）」「拡張（A）」の段階にとどまっており、紙教材のデジタル化や課題のオンライン提出といった、従来の学習方法をデジタル環境に置き換えたものが中心となっています。
- ・これに対し、「修正（M）」や「再定義（R）」の段階、すなわちICTを活用した新たな学びの形態への移行が十分に進んでいない状況が見られます。

2. 端末の性能面の問題

- ・端末の起動速度が遅く、授業中にスムーズに活用できない場面が多く報告されています。
- ・バッテリーの劣化が進み、長時間の使用が困難になっているため、授業時間内での端末活用が制限される事例が発生しています。

3. 学校間のICT活用の格差

- ・ICT活用が進んでいる学校とそうでない学校で、授業の進め方や教師のICTスキルに大きな差が生じています。
- ・ICTを積極的に活用できている学校では、プレゼンテーションや動画制作などを行う事例が見られる一方で、ICT活用に課題がある学校では、デジタルドリルの利用のみにとどまっているケースもあります。

3. 1人1台端末の利活用方策

【アプリの活用について】

GIGAスクール構想第2期に向けて、本市では現在利用されている学習支援アプリの見直しを進めています。今後は、学年ごとに最適な学習ツールを選定する方針です。

- ・小学校では、全員が同じ問題を解く時間も確保しながら、学習を進めていくことも重要であると考え、紙ドリルやAI機能のないデジタルドリルとの併用をし、基礎的な知識・技能の定着をめざします。
- ・中学校では、自律的に活用することが前提となるAIドリルを継続して利用します。今後の学力向上に向けて、AIドリルを活用し、効率的に知識・技能を定着させることで、生徒自身が考え学び合う機会をこれまで以上に確保するなどの授業改善を進めます。

また、授業支援アプリ「ロイロノート」は、教員・児童生徒ともに定着していることから、引き続き利用が継続します。さらに、Google Workspace for Educationを活用した共同編集機能を活かし、協働学習の機会を増やすことで、ICTを活用した学びの質を向上させることをめざします。

【教員の支援体制】

教員のICT活用スキル向上を支援するため、ICT支援員の配置を継続し、各学校に最大で月4回派遣する予定です。ICT支援員は、授業中の技術的サポートだけでなく、教材作成やICT活用のアドバイスなど、よりICTを用いた授業の支援を提供する役割を担います。

また、大学教授等の専門家が各学校をアセスメントし、課題を明確にした上で実態に応じた助言や改善策の提案を行う「GIGAスクール構想推進事業」を複数年かけて市内全体で実施する予定です。